

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「待望の教師応援ガイドが完成」



子どもは笑顔の数だけ幸せになります。そのために、まずは先生方が笑顔になることが大切です。学習面や行動面に困り感を抱える子どもに対して、小さい口（口出し・ダメ出しを少なくすること）と、大きい目（子どものよいところに注目してほめること）で関わってほしいという願いを込めて作成しました。「教師応援ガイド」の一部を紹介します。

1 「校（園）内支援体制の実際より」

【特別支援教育コーディネーターに求められる資質】

- ・各組織の利点を最大限引き出せる人
- ・地域の社会資源に精通している人
- ・保護者と信頼関係を築ける人
- ・子どもに必要な支援内容を整理できる人
- ・障害や特別支援教育に関する知識が豊富な人
- ・学級経営や教科指導に自信があり、学び続ける姿勢のある人

2 「子どもの見方・捉え方」より



目に見える行動（こだわり、かんしゃく、パニック、問題行動）は、ほんの一部にすぎない。その行動を引き起こしている背景（水面下の要因）には、根深くて複雑な要因が存在している。子どもの特性、環境・状況を踏まえながら、保護者に家庭での様子を尋ねるなど、見えない子どもの気持ち（不安や苦しみ）を、見える行動よりも大事にする。答えは子ども本人がもっている。

3 「子どもがつながり合う学級づくり」より

学級経営においては、「個」と「集団」とどちらが大事でしょうか。結論は、どちらも大事であり、両者のバランスが重要になります。「個」と「個」を結び、「つながり」が生まれ、学級「集団」になります。担任は「個」を見る目、「集団」を見る目、「つながり」を見る目が必要です。一人一人の違いを認め合い、みんなが支え合い、つながり合う学級をつくりましょう。

4 「子どもの学びを支える授業づくり」より

ユニバーサルデザインの視点による授業づくりは、個別の配慮が必要な子どもにとっては「ないと困る支援」であり、全ての子どもたちにとっては「あると便利な支援」です。全ての子どもの主体的な学びを支える授業づくりを実現するために、自校の「授業スタンダード」を作成して、全職員で共通理解を図りましょう。



5 「保護者への支援」より

「理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる」

人の考えは、経験によって左右されます。全て同じ経験を積んでいる人はいないので、保護者と指導者が100%理解し合えることは不可能です。伝わらないのは当たり前、だから100%伝わる努力が必要になります。

保護者とのミスコミュニケーションを防ぐためには、互いの立場を理解し、違いを認め合う、主語と数字をきちんと伝える、相手との共通点を探す、頷いて相づちを打ちながら話を聴く、実際に会って会話するなどが大切です。情報提供はするが、結論を急ぐことなく、保護者が答えを見付ける面談を目指しましょう。

6 「特別支援教育とおき情報」より

「知能検査について」

知能検査の結果は、同年代と比較（個人間差）してどの位置にあるかを示すもので、頭のよさを表した数値ではありません。他者と比べるのではなく、その子どもの得意・不得意（個人内差）を明らかにし、強みを生かして支援の方法を考えていきます。また、小学校高学年以上の子どもには、結果を伝えて自己理解を促す機会にします。

7 「教師のまなざし」より

「教師の役割」

私たちはよく〇〇ができない、△△もできないと話しますが、子どもたちはできないのではなく、できない状況に置かれているのです。だから、子どもたちができる状況を作っていくのが教師の役割です。子どもにさせる、やらせるのではなく、自分から意欲をもって取り組めるようにすること、これがよき教師です。子どもたちと活動を共にし、感じ合い、分かり合い、支え合うことを大切にします。



「にこにこ笑顔の大人は、最強の指導者！」

ルールは気持ちをコントロールすることを学ぶ道具ですが、ルールで縛ったり、強く言い聞かせたりするのは、子どもを早く変えたいという気持ちの表れです。子どもはルールよりもポールに従います。子どもは「自分が認めた大人」や「自分のことを分かってくれる大人」の言うことを聞きます。子どもと最も早く信頼関係を築く方法は、笑顔を見せることです。



とれたて直送便



「発達障害の子どもの不登校に対応するときの鉄則10」

①登校しぶりをするのは、問題の最終段階だと考える、②子どもがのんびり休養できるようにする、③子どもが親や先生に気軽に相談できる雰囲気をつくっていく、④子どもの話を聞くようにして親子関係を良好に保つ、⑤親と先生で連絡を取り合いながら、学校の環境を調整する、⑥環境を調整した上で、子どもに「こういう授業や行事があるよ」と情報提供する、⑦予定を具体的・視覚的に示して、参加の判断は本人に委ねる、⑧その日ごとに「学校に行くかどうか」を聞いて、淡々と対応する、⑨「本人がどうしたいのか」を大事にする、⑩学校以外に楽しく通える場所を探す。

長期的な対応としては、④「親子関係を良好に保つ」ことが特に重要である。また、進路選択という節目を迎える「中3の夏休み」までに、自己決定力と相談力を身に付けることが大切である。

「発達障害・グレーゾーンの子の不登校大全」より 著者：児童精神科医 本田 秀夫